書評

Catarina Pombo Nabais
Gilles Deleuze: philosophie et littérature
L'Harmattan、2013 年、519 頁

中島魁星*

1. はじめに

本書 *Gille Deleuze: Philosophie et Litérature*（『ジル・ドゥルーズ：哲学と文学』）は、Catarina Pombo Nabais による著作であり、パリ第 8 大学でジャック・ランシエールの指導のもと書かれた博士論文を元としたものである。Nabais は現在、リスボン大学理学部科学史・科学哲学科の研究員であり、近年では本書を元として Ronald Bogue によって翻訳された *Deleuze's Literary Theory: The Laboratory of His Philosophy* （2020）を出版している。

本書は、フランス現代思想を代表する哲学者であるジル・ドゥルーズの思想の中でも未だ体系的な整理が十分になされてはいない、哲学と、「芸術としての文学」との関係についての思考およびその変遷を明らかにするものである。

本書は冒頭においてひとつの問いを投げかける。それは、「ドゥルーズ的な文学-美学（esthétique littéraire）は存在するだろうか？」という問いである。これは、ランシエールの 1988 年のテクストのタイトルである「ドゥルーズ的な美学は存在するか?（Existe-t-il une esthétique deleuzienne ?）」を踏まえたものであり、本書における問いはそこから更に「文学-美学（esthétique littéraire）」に限定されたものである。「ドゥルーズ的な美学は存在するか?」という問いは本書において一貫した問題提起であり、この問題は以下で述べる超越論的経験論のプログラムと深く関係することになるだろう。

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；u661761i@ecs.osaka-u.ac.jp

2. 本書の概観

本書は三部構成となっている。

第一部「プルーストとザッヘルマゾッホ：カテゴリー、法、狂気」では、1963 年から 1970 年代前半までのドゥルーズのテクストが扱われている。また、この第一部は三つの章に分かれている。

第一部第一章「1964 年のプルースト：カント的文学論のために」では、『プルーストとシーニュ』（1964 年版）が、ドゥルーズの超越論的経験論（empirisme transcendental）にとって決定的なものとして理解されることが主張される。具体的には、同書における本質（essence）論(1)が、後述するような 1963 年のドゥルーズのカント論における「諸能力の不協和な調和」に中身を与える議論であることが確認される。そしてまた、この超越論的経験論のプログラムはドゥルーズによるヒューム論（1953 年）、ニーチェ論（1962 年）、カント論（1963 年）を通した変遷をたどることによってこそ理解されると主張される。その後、ドゥルーズの超越論的経験論とヒューム、ニーチェとの関係が論じられ、1964 年版の『プルーストとシーニュ』を、カント的能力論の実験室のようにして読むという道筋を Nabais は示す。

第一部第二章「ザッヘル＝マゾッホ：幻想から出来事へ」においては、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』におけるマゾヒズム的な「幻想」（phantasme）が、超越論的な使用における想像力の卓越した対象として、イメージの能力の発生点であることが明らかにされる。また、その後、『意味の論理学』における「幻想」と出来事（événement）間の関係が論じられる。

第一部第三章「1970 年のプルースト　文学機械」では、第二版の『プルーストとシーニュ』（1970）における文学機械の概念が、ジャック・ラカンの理論を踏まえつつ論じられる。この際に Nabais は、1964 年の第一版からの変化として、「機械」と「横断性」の概念の導入を挙げつつ、1968 年の『差異と反復』において時間の三つの総合を組織する超越論的原理とされていた「死の本能」の概念が見られる点を指摘している。

第二部「カフカとベーネ：文学の力」もまた三章構成である。

第二部第一章「カフカ――現実から法と想像力の果てへ」では、フェリックス・ガタリとの共著である『カフカ――マイナー文学のために』の読解を通して文学機械の概念について論じる。ここで筆者は、法の概念に対するドゥルーズの立場の変化の起源を、ミシェル・フーコーを読むことに見出す。具体的には、フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』（1975）における法の問題の変容こそが、ドゥルーズにカフカに対する新たな視点を提供したのではないかと主張し、『フーコー』（1986）の記述を参照しながら、言表（énoncé）の概念を追い、抽象機械（machine abstraite）の概念について論じる。

第二部第二章「カルメロ・ベーネとより少ない現実」では、俳優であり劇作家でもあるカルメロ・ベーネの演劇を扱ったドゥルーズの著作である『重合』について論じられる。この際、新しい文学理論がカフカの場合には《マイナー minor》として表現されたのに対し、ベーネの場合においては《モワン（より少ない）moins》として表現されることが主張される。

第二部第三章「出来事とアレンジメント：言表と此性（heccéité）」では、出来事概念の発生と変遷を追ったのち、幻想やエディプスのような精神分析的な概念に依りすぎていた出来事概念から逃れるために構築された概念としての「アレンジメント」（仏：agencement）について論じられる。

第三部「ベケットとメルヴィル：文学の可能性」も同様にして、三章構成である。

第三部第一章「可能性の精神化としての芸術」では、『哲学とは何か』（1991）の議論を踏まえながら、それ自体が独立している可能性の宇宙として、あるいは潜在的な出来事を現働化させるのではなく「受肉」させるものとしての芸術作品について論じられる。

第三部第二章「バートルビー、あるいは不可能の決まり文句」では、『批評と臨床』（1993）を中心として、メルヴィルの『バートルビー』が論じられる。その際、『バートルビー』という小説は「非文法性」、「生成変化」、「識別不可能な領域」、「どもり」、「イメージなき思考」、「透視力」、「欠落した人民の仮構」、「文学的過程」「言語の外側」、「独身者の共同体」、原初の役割、あるいは「知覚しえぬものになること」といった晩年のドゥルーズの主要な文学的テーマを凝縮したものとして提示される。

第三部第三章「ベケットと可能性の消尽」では、ドゥルーズ晩年のテク

ストである『消尽したもの』（1992）について論じられる。筆者は言語の消尽を、①語の言語の消尽　②声の言語の消尽　③イメージの言語の消尽という三つのレベルに分けた上で、ドゥルーズが純粋なイメージを逆説的なカント的視点から提示していることを示し、最後にそれを「崇高」概念とともに論じる。

3. 超越論的経験論のプログラム

前述のとおり、本書は三部構成となっており、そのそれぞれが作家に関する一連の本やテクストに対応している。第一部はプルーストとザッヘル＝マゾッホについて、第二部はカフカとベーネついて、そして最後に第三部はメルヴィルのバートルビーとベケットについてであった。この三部構成からなる議論は、ドゥルーズの著作を年代順に読み解くものである。しかし、Nabais によれば、これらの三つの部分のそれぞれを別の仕方で切り分ける不連続な線が存在している。その線は芸術としての文学と思考の関係という問題系に対するドゥルーズのアプローチの中でも最も重要な領域を構成するものであり、以下の三つのものである。

① 超越論的経験論のプログラム
② カント的崇高論との関係におけるマゾヒズム概念
③ 「潜在的なもの（le virtuel）」、「現働的なもの（le actuel）」、「可能的なもの（le possible）」、「ポテンシャル（potentialité）」といったドゥルーズの様態の概念

よって、本書においては、ドゥルーズの著作の年代に沿った三部構成という形式を取りながら、以上の三つの概念（あるいは概念群）についての変容が横断的に追われることになる。

ここでは特に①と②のアプローチの内実を説明する。そもそも超越論的経験論とは、カントの超越論的観念論を、主体や諸能力といったものの「発生」を問うものとしての経験論の立場から批判的にとらえ直すことによって徹底する試みであり、このとき探究される超越論的な領野とは、差異の強度的な世界であるとされる。

Nabais は、そのような超越論的経験論のプログラムを、ドゥルーズの文

学および芸術についての思考における出発点として位置づける。このとき、超越論的経験論のプログラムは芸術の経験からの思考の発生を記述するものとして考えられており、その原点はカントの超越論的美学にある。ここで指摘されるのは、ドゥルーズによる新しい超越論的経験論のプログラムがカントの芸術論の中心を批判的に継承しているということであり、その対象となるのは感性の理論としての超越論的美学と、同じく超越論的な美的判断（美や崇高さ）の理論としての美学との分裂という、カントの美学の概念そのものにある根本的な両義性である。このとき、カントの超越論的美学の定義についてドゥルーズが強く非難しているのは、知識の形式的条件（物質的条件ではなく）からの演繹という視点である。

それとは逆に、ドゥルーズが考えたいことは、まず、演繹ではなく、発生である。次に、形式的な条件ではなく、物質的条件からの発生である。最後に、これらの条件を可能な経験の条件としてではなく、実際の経験の条件として考えることである。つまり、問題となるのは前述のようなカントの美学における分裂であり、それは『差異と反復』においてドゥルーズが指摘したような、感性論（エステティック）と美学（エステティック）との間の分裂である(2)。

Nabais によれば、ドゥルーズの新しい美学の概念は、感性についての思考におけるこの分裂への応答として理解されるべきである。ドゥルーズにとって芸術作品は、感性の平面と美的感覚の平面の両方を創設するものであり、そのとき芸術作品は、可能な経験ではなく、現実的な経験の条件の物質化（matérialisation）として考えられる。

また、以上のような超越論的経験のプログラムにはいくつかの変容があり、それによって断層が形成されている。第一の断層は、ドゥルーズのヒューム論およびニーチェ論と、カント論およびプルースト論との間にある。そして、このヒューム論およびニーチェ論から、カント論およびプルースト論への移行の際に生まれたその断層は、カント的崇高論の重要性に対するドゥルーズの新たな理解に関わっていることが指摘される。

ここで言われているのは、1953 年のヒューム論および 1962 年のニーチェ論においてはカント的崇高論の役割は無視されているということである。同時に、ドゥルーズがはじめてカントの崇高概念に言及したのは、1963 年の論文 「L'Idée de la genèse dans l'esthétique de Kant」（カントの美学

における発生の観念(3)）であるということである。よって、思考に関する作品によって生み出された暴力としての「崇高」の概念（芸術作品からの思考の発生がその中に見出される）の出現が、超越論的経験論のプログラムの変容における第一の断層であると言うことができる。

その際、本書のアプローチとして特異的であるのは、本書においてドゥルーズにおける思考に対する「暴力」としての「崇高」の概念によってドゥルーズの思想に生じた内部的断絶を認識することによってのみ、『プルーストとシーニュ』（1964 年版）および『ザッヘル＝マゾッホ紹介』におけるマゾヒズム読解の独創性が解明できると主張する点である。

この背景にあるのは、ドゥルーズが 1964 年にプルーストを読み直すためにカント美学の遺産を再発明するという特異な方法を用いたのは、思考に関する作品によって生み出された暴力としての「崇高」の概念の発見によってであるという Nabais の仮説である。

このとき、1964 年の『プルーストとシーニュ』初版から、1967 年の『ザッヘル＝マゾッホ紹介』にかけて大きな変化が見出されていることになる。それは、前述のとおり、崇高と能力論についての変化である。ドゥルーズにとって、崇高の概念とは、怪物的なもの、巨大なもの、無限に偉大なものに対する美的判断から始まる、諸能力の不協和な調和を意味するものであった。ここで、カントが 1791 年に発見したのは、芸術が思考に与える暴力としての、すべての能力の美的起源、その発生点であった。それが「崇高」である。崇高とはまさに原点であり、それはすべての思考が不可能に直面し、この不可能を通して可能性を構築する瞬間だからである。

４．おわりに

本稿では *Gille Deleuze: Philosophie et Litérature*（『ジル・ドゥルーズ：哲学と文学』）*の中*でも特に第一部「プルーストとザッヘルマゾッホ：カテゴリー、法、狂気」の内容を中心に扱った。とりわけ、ドゥルーズにおける超越論的経験論のプログラムとカント的崇高論、そして『ザッヘル＝マゾッホ紹介』および『意味の論理学』における「幻想」概念が取り上げられること

となった。しかし、第二部以降にも、本稿では紹介しきることのできなかった多くの論点があり、特に、「潜在的なもの（le virtuel）」、「現働的なもの（le actuel）」、「可能的なもの（le possible）」、「ポテンシャル（potentialité）」といった概念についての議論はドゥルーズの芸術論を明らかにする上で極めて重要だろう。特に、『哲学とは何か』における「可能的なもの」「潜在的なもの」の位相の変化の議論を取り扱っているのは、本書において特異的な点である。

このように、ドゥルーズにおける哲学と文学の問題を初期から晩年まで、複数の横断的な視点から論じた本書は、ドゥルーズの芸術論の研究にとって非常に意義のあるものだと言えるだろう。

注

(1) 『プルーストとシーニュ』（1964 年版）、すなわち現在の『プルーストとシーニュ』第一部「もろもろのシーニュ」において、「本質」（essence）とは、「社交的シーニュ」、「愛のシーニュ」、「感覚的シーニュ」、「芸術のシーニュ」という四つのシーニュの中でも特に「芸術のシーニュ」において啓示される内在的差異であり、観点（point de vue）であるとされる。（Proust et les signes, p.55（『プルーストとシーニュ』57 頁）参照。

(2) Différence et répétition, p.94（『差異と反復』上 194 頁）参照。

(3) それぞれ、ヒューム論（1953 年）は『経験論と主体性 ヒュームにおける人間的自然についての試論』（1953）を、ニーチェ論（1962 年）は『ニーチェと哲学』 （1962）を意味しているが、カント論（1963 年）については、『カントの批判哲学』 （1963）とともに、『無人島 1953-1968』に収録されている論文である「カントの美学における発生の観念」（1963）も含まれる。

参照文献

Deleue,Gilles. 1968. Différence et répétition. Puf
（＝2007,『差異と反復』上下, 財津理訳,河出文庫.）

Deleue,Gilles. 2014[1964]. Proust et les signes. Puf
（＝2021,『プルーストとシーニュ』, 宇野邦一訳,法政大学出版局.）